

プロローグ

受容研究は常にリサーチが基本となる。今回のリサーチでこれまでの「日本ワイルド書誌」では全く紹介されていなかった古賀行義「オスカー・ワイルドの唯美的芸術観の要旨」を JAIRO のデータより発見した。⁽¹⁾ 古賀行義が『龍南会雑誌』に掲載した論文について紹介し、その内容について分析してみたい。

1 古賀行義

古賀行義(1891-1979)は熊本県熊本市に生まれた。第五高等学校卒業。大正 4 年(1915)7 月、東京帝国大学文科大学哲学科(心理学専攻)を卒業した。その後、東京帝国大学法科大学経済学科に入学し、大正 9 年(1920)に卒業。大正 10 年(1921)2 月には名古屋高等商業学校講師、11 月には教授。さらに、アメリカに 1 年、イギリス、ドイツその他に約 1 年半留学。昭和 5 年(1930)に広島文理科大学教授。その後、日本大学、二松学舎大学、城西大学の教授等を歴任した。昭和 31 年(1956)には「心的相関及び因子の研究」により日本大学より文学博士の学位を授与された。日本学術会議会員、学術奨励審議会委員、日本応用心理学会会長、日本心理学会学会長を務めた。

古賀の心理学における研究分野はおもに 4 点に大別できる。(1) 産業心理学、(2) 態度測定に関するもの、(3) 統計法・因子分析に関するもの、(4) 知能及び知能検査に関するものである。⁽²⁾

2 『龍南会雑誌』

『龍南会雑誌』は第五高等学校の校友会雑誌で、明治 24 年(1891)

に創刊された。執筆者には小泉八雲(1850-1904)、夏目漱石(1867-1916)、厨川白村(1880-1923)、高木敏雄(1876-1922)、寺田寅彦(1878-1935)等がいる。⁽³⁾ まず、第五高等学校について少し触れておきたい。旧制一高から旧制八高は以下の通りである。なお、一高から五高までは明治 19 年(1886)の中学校令公布、高等中学校官制が定まったことから始まる。括弧内は後身の大学である。

第一高等学校	(→ 東京大学)
第二高等学校	(→ 東北大学)
第三高等学校	(→ 京都大学)
第四高等学校	(→ 金沢大学)
第五高等学校	(→ 熊本大学)
第六高等学校	(→ 岡山大学)
第七高等学校造士館	(→ 鹿児島大学)
第八高等学校	(→ 名古屋大学)

第五高等学校の歴史をみておこう。

明治 20 年(1887)	第五高等中学校の設置が熊本に決定。
明治 24 年(1891)	文部省参事官嘉納治五郎が校長に任命される。 ラフカディオ・ハーン着任 『龍南会雑誌』創刊。
明治 29 年(1896)	夏目金之助(漱石)着任。

『龍南会雑誌』(『龍南』)の概要については、笠間益三「龍南会序」(第1号、1891年11月)、井上縫三郎「龍南文学小史思潮」(第200号、1926年12月)が詳しいが、4本のオスカー・ワイルド関係の

論文について注目しておきたい。実は、これまでの「ワイルド書誌」は『龍南会雑誌』『龍南』自体が全く取り上げられていなかった。従って以下の4本のワイルドに関する論文はいずれも本邦初の紹介となる。

第1は第131号(1909年6月)に掲載された戸澤姑射「デカダンス及び耽溺とは何ぞ此不健全なる思潮に対する覚悟」。本論文は6つのパート構成で、そのパート5の所でワイルドについて言及している。ワイルドへの言及は1箇所である。⁽⁵⁾なお、戸沢はシェイクスピアの翻訳者としても知られている。

第2は第144号(1912年2月)に掲載された古賀行義「オスカー・ワイルドの唯美的芸術観の要旨」。本論文は「虚言の頹廢」(The Decay of Lying)をまとめたものである。詳細は後述する。

第3は第158号(1915年6月)に掲載された上田吉郎「OSCAR WILD」。なお本来であれば、「WILD」は「WILDE」となるべきところである。

オスカー・ワイルド氏は十九世紀の末期に於ける耽美派詩人の第一人である。⁽⁶⁾

また、上田は次のようにも述べている。

彼は単なる世間並みの遊蕩児として評價すべきだらうか—
私は現代の文明及文藝に對してシンボリックな地位に立つた—とワイルドは云つた。彼は克く己を知れるものである。

(7)

*De Profundis*の内容を引用しながら紹介している。上田はワイルドの生涯を辿りながらワイルドのギリシャへの傾倒振りに注目しながら

ら、特にラスキンに言及している。しかしながら、マハフィヤペイターには全く言及はない。

第4は第228号(1934年6月)に掲載された西郷信綱「耽美主義文学 英文学に於ける伝統の意義」。タイトルにこそ「ワイルド」とは記載されていないが、明らかにワイルド論である。西郷自身も「小論のサブタイトルを仰々しい乍らも〈ワイルド研究〉とでも云へば云へない事もない。」⁽⁸⁾と述べている。

以上の4つの論文の他に触れておきたいのは、佐久間政一抄訳「拾九世紀の泰西藝術に及ぼせる日本美術の影響に就いての概観」(第165号、1917年12月)である。本論文はRichard Graul. *Ostasiache Kunst Leipzig* (1906)の一章を訳したものである。ワイルドへの言及はないが、ホイッスラーへの言及がある。

3 明治後半の日本のワイルド受容状況

古賀行義が「オスカー・ワイルドの唯美派的芸術観の要旨：論説」(『龍南會雑誌』第144号、1912年2月)を分析する前にこの時期の日本におけるワイルド受容状況を確認しておきたい。まず明治45年(1912)2月周辺の日本のワイルド受容状況は以下の通りである。おもに紹介、論文、翻訳が中心である。

- 1908年 6月 『東京二六新聞』(6月24日～26日) 二六社
平田禿木「詩人オスカー・ワイルド 上中下」
- 1908年 7月 『帝国文学』(第14巻第7号) 大日本図書
是影生「オスカア・ワイルドの戯曲」
- 1908年 7月 『文章世界』(第3巻第9号) 博文館
戸川秋骨「オスカー・ワイルドの戯曲の一節」
- 1908年 8月 『帝国文学』(第14巻第8号) 大日本図書
小林愛雄「オスカア・ワイルド詞華」

- 1908年 9月 『太陽』(第14巻第12号) 博文館
岩野泡鳴「詩人オスカーワイルド」
- 1908年 10月 『太陽』(第14巻第13号) 博文館
岩野泡鳴「詩人オスカーワイルド」
- 1908年 10月 『慶應義塾学報』(第135号) 慶應義塾発行所
野口生「ワスカー、ワイルドの復活理由」
- 1909年 1月 『早稲田文学』(第38号) 東京堂書店
岩野泡鳴「オスカーワイルドの劇 『キンダー
ミーヤ夫人の扇』」
- 1909年 2月 『早稲田文学』(第39号) 東京堂書店
岩野泡鳴「ワイルドの社会喜劇『熱心の大切な
事』」
- 1909年 3月 『新小説』(第14巻第3号) 春陽堂
小林愛雄訳「悲劇『サロメ』」
- 1909年 3月 『文章世界』(第5巻第4号) 博文館
本間久雄「人生も自然も芸術の模倣也」
- 1909年 4月 『スバル』(第1巻第4号) 昴
THE ACADEMY 舎生「オスカア・ワイルドの詩」
- 1909年 5月 『国民新聞』(5月21日~22日) 国民新聞社
夏目漱石、メレディスの訃
*「オスカー、ワイルドの使ふアフォリズムが
よくあれに似てるのがある。併しオスカ、ワ
イルドのは哲学ではない。気の利いたウキッ
トのやうなものだ。」
- 1909年 5月 『スバル』(第1巻第5号) 昴
「Oscar Wilde」
- 1909年 5月 『帝国文学』(第15巻第5号) 大日本図書
厨川白村「オスカア・ワイルドの警句」

- 1909年 6月 『太陽』(第15巻第8号) 博文館
野口米次郎「オスカー、ワイルドの一面」
- 1909年 7月 『丁西倫理講演集』(第82集) 大日本図書
西田幾多郎, 神と世界, pp. 65-73
* 『善の研究』(弘道館、1911年1月)の「第4編 宗教」の「第4章 神と世界」として所収された。ワイルドの『獄中記』*De Profundis*への言及がある。
- 1909年 8月 『帝国文学』(第15巻第8号) 大日本図書
* 挿図として、英吉利詩オスカア・ワイルド「画像」が掲載されている。
- 1909年 8月 『ムラサキ』
「セバスチャン・メルモス」より
- 1909年 9月 『歌舞伎』(第110号) 歌舞伎発行所
森鷗外訳「戯曲『サロメ』」
- 1909年 10月 『歌舞伎』(第111号) 歌舞伎発行所
西洋近代劇の舞台写真(其八、サロメ)
森鷗外訳「戯曲『サロメ』」
- 1909年 11月 『歌舞伎』(第112号) 歌舞伎発行所
林久男「オスカア・ワイルドの「サロメ」に就いて」
- 1909年 12月 『早稲田文学』(第49号) 東京堂書店
本間久雄「現実を離れんとする文芸」
- 1909年 12月 『趣味』(第4巻第12号) 易風社
川島風骨「セバスティアン・メルモス」
- 1910年 1月 森鷗外『統一幕物』(易風社)に収録。
* 「戯曲『サロメ』」
- 1910年 2月 『白樺』(第2巻第2号) 洛陽堂白樺社

里見弴訳、「鶯と薔薇」, pp. 74-83

1910年 2月 『太陽』(第16巻第3号) 博文館

*M. K. 訳「鶯と薔薇」

1910年 4月 『早稲田文学』(第53号) 東京堂書店

本間久雄「頽廢的傾向と自然主義の徹底意義」

1910年 4月 『心の花』(第14巻第4号) 竹柏会出版部

金子健二訳『フロレンスの悲劇』,

1910年 7月 『帝国文学』(第16巻第7号) 大日本図書

田波御白訳「我儘な巨人」

1910年 7月 『早稲田文学』(第56号) 東京堂書店

本間久雄「思ひより」

1910年 10月 『帝国文学』(第16巻第10号) 大日本図書

田波御白訳「オスカア・ワイルドの散文詩」

1910年 10月 『早稲田文学』(第59号) 東京堂書店

本間久雄訳「秘密を好める女」

1910年 10月 『東亜之光』(第5巻第10号) 東亜協会

田波御白訳「親友」

1911年 1月 『早稲田文学』(第62号) 東京堂書店

『ドリアン・グレー』の序文」

1911年 3月 『早稲田文学』(第64号) 東京堂書店

本間久雄「オスカー・ワイルド論」

1911年 5月 『読売新聞』(5月14日) 読売新聞日就社

国枝史郎, オスカー・ワイルドの死(上)

1911年 5月 『読売新聞』(5月21日) 読売新聞日就社

国枝史郎, オスカー・ワイルドの死(下)

1911年 6月 『帝国文学』(第17巻第6号) 大日本図書

生田長江「藝術家としての耶蘇」

1911年 8月 『三田文学』(第2巻第8号) 三田文学会

- 佐藤春夫「キイツの艶書の競売に附せらるると
き（オスカア・ワイルド）」
- 1911年 8月 『心の花』（第15巻第8号）竹柏会出版部
天沼匏村訳「恋の創傷」
- 1911年 8月 『学燈』（第15年第8号）丸善
砂邱子「Oscar Wilde の“Vera”」
- 1911年 10月 『早稲田文学』（第71号）東京堂書店
本間久雄訳、『獄中記』
- 1911年 10月 『大阪新報』大阪新報社
野口米次郎，ワイルドと巴里
- 1911年 11月 『文章世界』（第6巻第15号）博文館
浦瀬白雨「オスカー・ワイルドの『ドリアン・
グレー』」
- 1911年 11月 『東京朝日新聞』（11月5日）東京朝日新聞社
内田魯庵「翻訳劇『革命婦人』を載せるに就て
の口上」
- 1911年 11月 『東京朝日新聞』（11月6日～12月29日）東京朝
日新聞社
内田魯庵訳「悲劇『革命婦人』」
- 1911年 12月 『六合雑誌』（第371号）六合雑誌社
内ヶ崎作三郎「宗教生活の芸術的内容」
*「オスカー、ワイルドのイエス観」(pp. 568-569)
の一節がある。これ以外にもワイルドへの言及
がある。
- 1912年 1月 『早稲田文学』（第74号）東京堂書店
生方敏郎「オスカー、ワイルド警句集」
- 1912年 2月 『早稲田文学』（第75号）東京堂書店
生方敏郎「オスカー、ワイルド警句集（2）」

1912年 2月 『時事新報』（2月25日～3月13日）時事新報社

森嶋峰訳「喜劇『手提鞆』」

1912年 4月 『読売新聞』（4月7日）（日曜附録）読売新聞日就社

島崎藤村，新片町より

島崎藤村，自由

* 通例この紹介については「オスカー・ワイルドの言葉」と題して紹介されている。

翻訳を除けば、いわゆるワイルド論と言えるものは本間久雄の論文ということになるだろう。（下線部）さらに、論文題名としては「オスカー・ワイルド」と「唯美主義」あるいは「唯美派的芸術」を並列した論文がなかったことも一連の調査で明らかである。

4 「オスカー・ワイルドの唯美派的芸術観の要旨」

本論文は『龍南會雑誌』（第144号、1912年2月）に掲載されたものである。執筆者の古賀行義は、後年文学博士を取得し、日本学術会議会員、学術奨励審議会委員、日本応用心理学会会長、日本心理学会会長を務めた。一連の古賀の業績一覧には本論文は紹介されていないが、その内容が心理学分野でないことから、除外されたとしても不思議ではない。ここでは、古賀の「オスカー・ワイルドの唯美派的芸術観の要旨」がどのような内容であるか、そしてそれは発表された時期を考えると日本のワイルド研究上、どのような位置付けができるのかを考察していきたい。

本論文の冒頭は次のように紹介されている。

言語の色彩家（Verrbae colorist）ワイルドの人工的な、

唯美、荒誕を目的とする藝術観はその小論文中では虚言の頽廢、(The decay of lying)及び藝術家としての批評(The critic as artist)に最も好く表れてゐると想ふ。是等の唯美派的の藝術観はまた、彼の人々観に多大の影響を及ぼして、それがパラドックス的であるが如く彼の生涯も頗る剣呑で、榮耀と糜殘の兩極に走り「現代に對つて最もシンボリックな地位」を作った。頃來彼の生涯を想ひ、彼の二三の著書を獵り最後にド・プロファンデスを讀みもて行く内に、悲哀を追う快樂的情調が愈、彼の可愛さを悟らかすの如く感じた。そして今更、ある獨逸学者がザロメを評して云つた「死に於ける戀、戀に於ける死」なる言葉を偲ばせた。私は以下「虚言の頽廢」からの面白い節を抜いて、彼の藝術観の大体を窺ふと想ふ、是に云ふ虚言の意味はあとで出てくる通り「美にして實際ならぬ物語り」の謂である。原文は對話であるが私は一文に草した。故を以て没興味な、不透明な難澁に終るとせば、そは抜書で且つパロヂーであるからである。(9)

“The Decay of Lying”はワイルドの藝術論の根幹を為すものであるので、この作品を取り上げたこと自体に大いに意味がある。さて、古賀は「新なる美学の教義」として次の3点として取り上げた。

(一) 藝術は其れ自身の外何物も顯はさぬ。思想と同じく獨立のライラを有して、自己の眼の向ふ所に發展する寫實主義の時代に於て寫實的なるの必要なく、信仰の時代に於て精神的なるの必要もない。(省略)

(二) 凡ての拙悪なる藝術は、自然と人生に歸り、それを理想に高める事から生ずる。人生と自然は時に藝術の原料品の一部として用ゐらる。(省略)

(三) 藝術は人生を模倣せんと云はんより、寧ろ人生が藝術を模倣す。是は単に人生の模倣的本能からばかりでなくて人生の自覚ある目的は、表現を求むるにあるとの事實及び藝術が人生に、そのエネルギーを實現する為の美なる與へる事實からの結果である。(10)

もちろん、ワイルドの芸術論で“The Decay of Lying”を取り上げればこの箇所を取り上げるは当然のことである。本間久雄の「オスカ・ワイルド論」(1911)では

藝術は人生の模写でなくて、その改造である。従って人生は却つてその改造された藝術を模倣すべきである。(11)

美を以て藝術の究竟目的となした(12)

と、紹介されている。ここでもうひとつ紹介しておきのは本間論文で、ワイルドの詩を紹介している部分である。

或る評家の云ふ如く、ホイッスラーが「色彩の音楽」“Colour-musician”ならば、ワイルドは確かに誰やらが云うたやうに「言葉の色彩家」“Verbal-colorist”と云うてよからう。(13)

古賀のこの論文は“The Decay of Lying”の内容を論説したものである。本間論文(1911)がすでに先行研究として発表されていたが、古賀論文はその題名にもある通り、「オスカー・ワイルド」と「唯美派的藝術観」を並列して発表している点が大きな特徴であろう。

“The Decay of Lying”の翻訳は大正2年(1913)6月に矢口達訳『架

空の積塵』(新陽堂)として発表されていることを考えると、本間論文(1911)よりもさらにその内容を伝える役割を担ったことになる。前述の「3 明治後半の日本のワイルド受容状況」からも古賀論文(1912)は本間論文(1911)に次ぐものであるが、ワイルドの藝術観を「唯美派」として銘打ったことは大きな意味がある。

エピローグ

古賀行義「オスカー・ワイルドの唯美的芸術観の要旨」(1912)の論文についてまず、その背景を探り、論文の意義を考察した。しかし、これまでの古賀行義の経歴等を見ても、「オスカー・ワイルドの唯美的芸術観の要旨」については言及が見当たらない。しかし、心理学者である古賀行義が後年、文学に関する論文を自ら取り挙げなかったことも十分に考えられることである。1891年生まれの子古賀がまだ学生の頃に書いた論文を後年あえてリストから外したとしても容易に理解のできる場所である。

明治期におけるワイルド研究は必ずしも英文学者がだけが紹介していたわけではない。明治期のワイルド研究と言え、本間久雄がその第一人者と言えるだろうが、その本間も「唯美主義」を論文等で題名に出すまでにはもう少し時間がかかっている。この意味で古賀論文の発表の意味は、唯美主義者としてのワイルドを捉えたことは高く評価されなければならないだろう。

注

(1) JAIRO とは Japanese Institutional Repositories Online の略で、学術機関リポジトリに蓄積された学術情報を横断的に検索できるサービス。(http://nii.ac.jp/help/about_us.html)

(2) 大泉博編『日本心理学者事典』(クレス出版、2003年2月)、

- pp.446-449.／古浦一郎「古賀行義先生のご逝去を悼む」(『心理学研究』第50巻第3号、1979年9月)、p.175.
- (3) 中村青史「龍南会雑誌」(熊本日日新聞社熊本県大百科事典編集委員会編『熊本県大百科事典』熊本日日新聞社、1982年4月)、p.865.
- (4) 拙著『日本ワイルド研究書誌』(イ-コン、2009年2月)から抜粋した。
- (5) 戸澤姑射「デカダンス及び耽溺とは何ぞ此不健全なる思潮に対する覚悟」(『龍南会雑誌』第131号、龍南会、1909年6月)、p18.
- (6) 上田吉郎「OSCAR WILD」(『龍南会雑誌』第158号、龍南会、1915年6月)、p.4.
- (7) Ibid., p.5.
- (8) 西郷信綱「耽美主義文学 英文学に於ける伝統の意義」(『龍南会雑誌』第228号、1934年6月)、p.1.
- (9) 古賀行義「オスカー・ワイルドの唯美派的芸術観の要旨」(『龍南會雑誌』(第144号、龍南会、1912年2月)、pp.1-2.
- (10) Ibid., pp.29-30.
- (11) 本間久雄「オスカア・ワイルド論」(『早稲田文学』第64号、1911年3月)、p.19
- (12) Ditto.
- (13) 本間久雄「オスカア・ワイルド論」、pp.5-6.

キーワード：ワイルド、古賀行義、唯美主義

* 今回のリサーチでは熊本大学附属図書館利用相談担当：永村典子様には貴重な情報を提供して戴いたことを紙面を借りて感謝申し上げます。

* 『龍南会雑誌』のリサーチでは熊本大学学術リポジトリ (Kumamoto University Repository System) 及び龍南会雑誌目次 (<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/ryuman/mokuji.html>) を利用した。また、内容に支障がないところは印刷の都合上、旧字は新字にあらためた。